

## 「動物園大好き市民会議」第1回専門委員会 議事録

- 1 日 時 平成21年4月13日(月) 午前9時～午前11時
- 2 場 所 動物園 視聴室
- 3 出席者 専門委員 13名  
有識者 伊谷原一委員, 大頭肇委員, 小篠清委員, 近森節子委員,  
升光泰雄委員, 山内五百子委員, 山極寿一委員, 山田秀司委員,  
市民団体 大島由紀子委員, 澤辺吉信委員, 島田昭彦委員, 中山誠委員, 山本  
皓一委員

京都市

文化市民局長 山岸 和, 文化芸術都市推進室長 平竹耕三 他

動物園長 長谷川淳一, 副園長 秋久成人 他

- 4 議 題 別紙次第のとおり

### 5 概 要

#### (1) 動物園長挨拶

長谷川園長 これより「動物園大好き市民会議」第1回専門委員会を開催いたします。本日は大変お忙しい中、御出席賜りまして、誠にありがとうございます。本日、前半部を進行いたします動物園長の長谷川でございます。よろしくお願ひ申し上げます。早速でございますけれども、最初にお手元の次第に従いまして、市長の委嘱状を皆様方に交付させていただきますと存じます。なお、時間の都合上、恐れ入りますけれども、委員を代表いたしまして、伊谷原一様に文化市民局長より委嘱状を交付させていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。

山岸局長 (委嘱状交付)

長谷川園長 ありがとうございます。なお、委員の皆様方におきましては、お席の方に委嘱状を配布させていただいておりますので、御確認のほどよろしくお願ひいたします。それでは、第1回専門委員会の開催に当たりまして、京都市を代表いたしまして、文化市民局長山岸の方よりご挨拶を申し上げます。

山岸局長 皆様おはようございます。京都市文化市民局長の山岸と申します。どうぞよろしくお願ひします。

ただいま、「動物園大好き市民会議」専門委員の先生方に委嘱状の交付をさせていただきました。この「動物園大好き市民会議」につきましては、去る3月27日に市民公募委員21名の方に既に委嘱し、第1回のワークショップを開催いただきました。想像以上の

多くの方の応募がございまして、委員数を当初予定の15名から21名に増員いたしました。皆様方の良い動物園をつくってやろうという意気込みを感じたところでございます。

本日、専門委員の先生方、13名の方に委嘱状を交付させていただきました。私どもといたしましては、これからの良い動物園を創っていく上で本当にふさわしい先生方に委員をお引き受けいただいたと考えております。

さて、京都市動物園は明治36年に開園した、上野に次いで2番目に古い、伝統ある施設です。しかし、この間大規模な改造等はほとんど行っておりません。したがって、現在にマッチしているかどうかも含め、皆様方に色々なアイデアをお願いしたいと思います。最近の動物園は、旭山動物園をきっかけに、非常に話題となっております。その旭山動物園も、昨年度の入園客は減ったという報道が出ておりました。おそらく、観光客の影響だと思われます。そういう意味でいきますと、京都市動物園は恵まれていると思います。京都市内で交通の便が良く、近隣の市町からも来ていただける、また、滋賀県からも来ていただけるということで、特に観光客を意識しなくても良いと思います。そういう意味では皆様方にじっくりと考えていただいて、良いアイデアをどんどんお出し願います。

私どもは、来園者にとって、そして、動物にとって良い動物園であるということを心がけていきたいと思っております。

本構想は、1月に市長が発表したものでございます。動物園の整備にとっては、良かったのですが、その一方では、京都市の非常に厳しい財政状況の中で、今回委員に御就任いただいておりますが、子育て関係等の予算をカットせざるを得なかったということで、このお金が無い時に7年で30億円、何でこんなお金が無い時にこういう事をやるのかというアゲインストの風もあったという、これは紹介だけをさせていただきます。

私どもとしては、必要な経費を京都市が全てを負担するというのではなくて、色々な形での御支援いただいて、そういうことも含めて皆様方にアイデアを出していただければと考えております。

京都市動物園の先駆的な取組といたしましては、ゴリラの3世代繁殖がございまして、この4月18日には京都大学との連携の下、チンパンジーの群れ飼育も始まりました。今までのすばらしい取組を、これからも継続していきたいと考えております。

そして、もう一つ私どもが絶対に忘れてはならないのが、皆さんもご承知のとおり、昨年6月の職員の死亡事故でございます。動物園を楽しんでいただく上では、安全が一番大事だと思っております。本日動物園の職員がおりますけれども、全てその当時の職員です。これらの思いを常に持ちながら、今回市民の方々に本当に楽しんでいただける動物園づくりを進めていきたいと思っております。

先生方には、熱心な御討論をお願いすると共に、本年度途中にはすばらしい構想ができていくことを期待いたしまして、私の最初の御挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

長谷川園長　ありがとうございます。ここで、大変恐縮でございますけれども、専門委員の皆様方の自己紹介をお願いしたいと存じます。名簿に従いまして、伊谷委員様の方から一

言よろしくお願い申し上げます。

(各委員自己紹介)

長谷川園長　それでは、ここで、本会議の要綱第4条第2項に基づきます、座長、副座長の選出をお願いしたいと存じます。先ず、どなたか座長をお願いできませんでしょうか。また、どなたか御推薦をいただける方ございませんでしょうか。

山極委員　大変、僭越ではございますが、京都大学の野生動物研究センターの伊谷先生にお願いできればと思います。伊谷先生は動物園にも詳しく、非常に広い視野でやっていたのでないかと思います。

長谷川園長　今、山極委員から、伊谷委員の御推薦がございましたが、どうでしょう皆様、伊谷先生に座長になっていただくということで御異議はございませんでしょうか。(拍手)  
どうもありがとうございます。それでは、伊谷委員、座長席の方に移動をお願いします。  
(伊谷委員座長席に移動)

ありがとうございます。それではこれより、議事進行につきましては、座長の伊谷委員にお願いをいたします。よろしくお願い申し上げます。

伊谷座長　座長を仰せつかりました伊谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。  
それでは、これより、要綱第4条第2項に基づきまして、副座長の選出を行います。副座長は座長が指名することになってはいますが、わたしもわからない部分もございます。推薦いただけましたらと思います。お願いします。

中山委員　島田さんをお願いできたらと思います。副座長に推薦します。

伊谷座長　今、島田委員を推薦していただきました。是非、いろいろな広い方面からお仕事をなさっているということで、私もお願いしたいのですが、いかがでしょうか。(拍手)  
そうしましたら島田委員に副座長をお願いするというので決定したいと思います。  
(島田委員副座長受諾の発言)

ありがとうございます。それでは、早々ですが議事に入りたいと思います。これに先立ちまして、大島委員が所用により退席されるという申し出をいただいております。恐れ入りますが皆様、御了承願いたいと思います。

(大島委員退室)

それでは議事を進行いたします。市民会議の内容や本委員会の議論の対象となります新京都市動物園構想(素案)につきましては、本日までに動物園の方から資料が配布され、説明が終わっております。時間の都合上、これらを前提に進めたいと思います。よろしくお願いいたします。

先ず、最初にこれまでの「動物園大好き市民会議」の取組状況等を事務局から御報告をお願いします。

秋久副園長　それでは、副園長の秋久の方から報告させていただきます。本日お配りしました「これまでの取組及び今後の予定について」と、先般お配りしました、「動物園大好き

市民会議の運営について」を御覧いただきながら御説明申し上げます。

先ず、「動物園大好き市民会議の運営について」にあります、「市民委員によるワークショップについて」でございますが、委員構成等につきましては、2月2日から13日までの間、広く市民の皆様から応募いただき、当初募集人員15名のところ、78名の応募がございました。資料にありますように、年齢構成では40歳代が21名で一番多ございました。応募人数が78名と多数でしたので、選考人数を21名に増やし、選考をお願いしました。選考された委員の男女比率は、男性が8名、女性が13名ということで応募状況を勘案して選考いただいております。なお、この選考につきましては、伊谷先生、山田元園長、山岸局長をお願いいたしました。

続きまして、市民委員ワークショップですが、第1回を3月27日午後1時から3時間半にわたり開催させていただきました。内容につきましては、動物園を考えるキーワードは環境エンリッチメントということで、NPO法人である市民ZOOネットワークの理事である落合知美さんによる講演を行い、続いて園内見学を行った後、共汗でつくる新京都市動物園構想（素案）を園長の方から説明申し上げます。終了時には、委員の皆様からアンケートをいただき、第2回目以降のワークショップへ繋ぐというような形で開催させていただきます。第2回目の開催予定ですが、4月28日の火曜日午後1時から4時までを予定しております。

次に、この表のその他の取組ですが、先ず、「子どもが描く未来の動物園について」は、京都市在住又は通学の幼児、小学生及び中学生が思い描く未来の動物園の絵画や作文を、4月10日から5月10日までの間、募集させていただいております。

次のページをご覧ください。「親子で語ろう未来の動物園会議」でございますが、京都市在住の親子30組、これは幼児から小学校3年生までの子どもとその保護者を対象に、園内見学の後、楽しみながら動物園に対する意見や要望について、その場で語り合う企画で、4月1日から17日まで募集を行い、5月10日、午前11時から午後2時30分までの予定で開催いたします。10日金曜日現在、5組16名の方から応募いただいております。なお、この会議の進行につきましては、NPO法人市民ZOOネットワークに御協力をお願いしているところでございます。

続きまして、「意見箱の設置」ですが、3月24日火曜日から園内4ヶ所に設置しております。ポスターを掲示し、入園者の皆様からアンケートによる御意見を募っております。昨日までで、175通の御意見が寄せられております。内容につきましては、現在集計中でございます。また、4月18日に類人猿舎がリニューアルオープンをいたしますので、類人猿舎にも意見募集箱を設置し、全体で5ヶ所で色々な御意見を募ってまいります。

なお、レジュメの中には書いておりませんが、表の一番右端の部分、「京都市未来まちづくり100人委員会」でございますが、100人委員会の中に「人々の心を豊かにする地区岡崎」ということで、岡崎ホールディングスというグループがございまして、動物園、美術館の岡崎地域全体を考える分科会があります。3月10日に動物園に視察に來られ、約3時間かけ現状を知っていただきました。

以上が、現在まで取組状況でございます。

伊谷座長 ありがとうございます。只今の事務局からの御報告に対しまして何か御質問、御意見等ございましたらお願いいたします。よろしいですか。それでは、次に進行を進めます。

次に、素案の審議を行いたいと思います。本日は、先日の動物園からの説明を基に、素案全体について、また、素案の11ページまでの動物園の現状や課題、新しい動物園の7つのコンセプト等について、何か御意見、御質問、御要望等がございましたら、よろしくお願いいたします。

何かございませんでしょうか。

山極委員 ちょっとよろしいですか。1ページ目に動物に近い動物園、「さすがだなー」と思ったのですが、狭さを逆に利用して近いということを強調して、新しいことをされると思っていますが、この近さというものを生かした動物園というのを具体的にもう少し説明していただけたらと思うのですが。

秋久副園長 山極先生から御指摘がありましたとおり、狭いということを逆利用したいというふうに思っています。ここ最近、色々取り入れられているガラスを利用した展示、どうしても檻があると人止め柵を設けて距離が出てしまいます。そのロスをできるだけ少なくしようということで、ガラス面を使ったり、色々な工夫をすれば、体感できる、においが感じられるとか、例えば動物が動いた振動が感じられるとかを考えております。

また、直接動物に触る「ふれあいコーナー」とかで近さを出す。昭和30年に本園に「おとぎの国」が全国で始めてできて、そのおとぎの国で触れ合うということに対しては、大きな評価を得ながら今もずっと続けております。ただ、かなり狭いですから、こういう近いということを訴え掛けながら、触れあえる場所をできるだけ広く取れないかというような思いがこの素案の中にあります。できれば一番最初に整備したいという思いも含めて、素案を作成しました。

そういう体感をしながら、ガラスを利用した展示だとかも含めながら、動物にストレスを与えない環境エンリッチメントに十分配慮した中で、近くに動物が来てくれるような場所づくりを心がけていきたいと考えております。

まだ、素案の中には具体的にどうしたらといった細かいところまでは落とし込めておりませんが、実際にはゾーニングしていくことで、そのゾーニングにいる動物たちの特性を生かして取り入れたいと考えております。味覚も含めた五感をできるだけ感じられる、ゾーニングをゾーン毎に導き出すことで、五感に訴える動物展示を取り入れていければと思います。委員の皆様方の色々な御意見を反映しながら構成できればというふうに考えております。

山極委員 一言だけ申し上げますと、動物にストレスを感じさせないエンリッチメントというのは、たぶん非常に重要になると思います。世界の動物園で、今観客から見られるという体験からくるストレスを、なるべく動物に感じさせないような動物舎づくりというのが、強く進められておりますので、そこは一つ工夫をされた方がいいと思います。例え

ば、ビデオカメラを利用して、あるいはシェルターを利用して、動物に人間の目を感じさせずに、人間の方は非常に動物を身近に感じられるというような装置を考えると、それはたぶんアイデアだと思うんですよ。そういう事をしながら、動物も日々さまざまな刺激があつて、逆に見られる一方ではなくて、動物の方から何か人間の方にも働きかけるような施設ができれば、人々も単に動物の姿や形を見るのではなく、様々な仕草なり、その動物の、先ほど味覚とおっしゃいましたけど、どうやってどういう気持ちで何かを食べているのかというのが感じられるような施設になるんじゃないかと思います。

秋久副園長 貴重な御意見をありがとうございます。先生の意見に付け加えさせていただいたら、動物の思いというのは様々で、ガラス面にすれば近くに見えるだろうという発想でスタートした「サル舎」が、今、動物って人が近づいたら怖がって逃げるんですが、エンリッチメントのことも含めて考えていかななくてはならないこと、ただ、逆に今までは檻越しに見ていたから余り感じなかったこと、例えば、シロテテナガザルは人に寄って来る。あえてガラスの場所で人と接するというか、直接には人と触れ合えないのですが、人にくっついて、人の動作に近づいて来るというような事も見受けられる。動物が思う行動を取り入れた展示方法を考えていかなければと思っているところです。

近森委員 今回の素案の中でキーワードが2つあると思いますが、「近くて」と「楽しく」で、近くては今、山極先生がおっしゃった、動物との距離が近いということは楽しいにも通じるんですけども、楽しい動物園をどこで、具体化されようと考えられているのかとうことがもう一つのキーワード、それをもう少し説明していただきたいと思います。

秋久副園長 楽しいには色々あつて、動物にとって楽しい、来園者にとっても楽しい、私たち現場の人間も仕事をしていて楽しい、それらを絡めていけたらと思います。私たち自身が楽しいというのは、今徐々に築き上げている素地ですが、現場の人間が直接お客様に対して、常日頃動物たちと接している、その動物と私たちの楽しい関係づくりを知ってもらつて、その楽しさを伝える。実際に現場で働いている人間と来園者の接触を増やす。

また、近いというキーワードにつながりますが、そういう取組、日々の行動がずっと続けていくことで、その楽しいというのが、ストレートに今すぐ楽しいという楽しいではなくて、楽しいというのを日々の流れの中で創っていく。動物がいる、それを飼育、管理する私たちがいる、それを御覧いただく皆様がいる、というようなトライアングルの中で、どんどん廻す手立てというのは、やはり練り上げていくものだと思います。今、楽しいから、これをすれば楽しいというのはちょっと違う。練り上げができていけるような、ストレートにそれが施設づくりに繋がらないと思いますが、そういう広がりを持っていけるような関係づくりができるように思っています。今、現場の人間にとっては、市民の皆様の声を練り上げているというものの、現段階では十分聞き取れていないところがあります。市民会議の皆様の色々な声を聞きながら、生かしていけるところは細かいところまでどんどん取り入れてやっていきたいと考えています。

山極委員 面白い、楽しい動物園というのは実はすごく難しい問題だと思います。例えば、どこかの動物園で二足で立っているレッサーパンダがいる。これは面白い。見に行こう。

一時的にお客さんが増えるかもしれないが、いつもレッサーパンダが立っている訳ではない。あるレッサーパンダの奇妙な行動の側面を、人々が面白いと思って来てくれる。決して悪いことではない。ここで必要なのは、そこからレッサーパンダの野生の暮らしや実際動物園にいるレッサーパンダの行動のおもしろさをどう伝えられるか。普通は動物園に来る人々というのは、そんなにその動物の知識を持って来る訳ではない。その知識は、動物園側がガイドをする必要があって、その知識には2つあると思います。

一つは現場の知識です。タロウくんという名前をついたレッサーパンダがいるとします。そのタロウくんがいったい毎日何をして暮らしているのか、何を食べて、いったい何時頃寝て、現場の飼育員でしか知らない様々なレッサーパンダの行動を解説する。これは結構おもしろいです。飼育員が実際楽しいと思っている行動を伝えることができる。ただ、そこからレッサーパンダはどのような動物なんだろう。どこに住んでいるんだろう。群れで暮らしているんだろうか、単独で暮らしているのか。夜行性なのか、昼行性なのか。他にどんな動物がいるんだろうか。色々な興味が湧いてくる訳ですよ。その背景を伝えるガイドもした方がいいと思います。それは、あまり押付けがましくやると、人々はかえって引いてしまうんですね。それを人々の興味に応じて、多彩に提供できるように、色々な楽しみ方ができるように動物園側が提供する必要がある。あまり飼育員の現場の方に負担を掛けてはいけませんけれども、やはり、現場で見ている楽しさと面白さというのが一番ストレートに観客に伝わると思うんです。そういうことを通じて、その動物の背景に興味を持たせるような仕組みを考えていただけたらと思っています。

長谷川園長　　今、お話がありました件ですが、8ページに7つのコンセプトの中で、まだ私たちは具体的なまとめができていませんが、楽しく学べる動物園を京都市動物園の特徴として大きく打ち出していきたいと考えています。近森先生の御質問、山極先生の色々なお話を頂戴しましても、やはり、学びあるいは学習については、楽しく来園者の皆様、子どもたちから高齢者の方まで色々な世代の方々楽しく学んでいただいて帰っていただく、また来ていただいて、というふうな感じを追求していきたいと思っています。

島田委員　　今、山極先生のお話を伺って、楽しいという言葉置き換えると「わくわくする」という言葉に置き換えられると思うんです。そこに行くことによって得られる知識欲とか、動物の行動を見ることで何かひらめく事とか、そのワクワク感を常にニュースとして発信していくこと、これはすごく大切なことと思っています。もう一つ、私がメディアに出るときに必ず気をつけることがあって、企画をするときのポイントですが、難しいことをそのまま難しく伝えることは実は簡単なんです。それを分かりやすく、誰もが小学生が来ても難しいことをわかりやすく吸収できるような、そういった言葉の表現だとか、プレゼンテーションの仕方がすごく大切だと思いますので、これは動物園に限らず色々な世の中の仕組みを創って、仕掛けて、発信するということがポイントかと思っていますので、この会議を進めていく上でのテーマと課題として考えていくのが良いかと思っています。

升光委員　　既にお話の中に出ていたと思いますが、飼育員の方、現場の方々の想いや意図がどれくらいこの構想に入っていて、今後の話を受けて、そこに関わっていかれることに

なるのかということをお聞きしたいと思います。ここ数年、動物園を訪ねてみて、飼育員さんとのやり取りが自然の形で関わっているというか、広がっているのをすごく感じて、動物を見に来たよだけでなく、そこで共に過ごしている飼育員さんのお話や係わりが随分できているなという気がしているんですけど、それが新しい構想の中で、人を通して一緒にその動物と出会わせていただくことが、大きな喜びの一つなのかなという気がしています。

もう一点は色々整備したりして、整っていくときに整わない部分がどれくらい残されているのが、広い意味での整っていくということなのかなと気がしまして、どういう部分を目に見える形で整えて、どういう部分をあえて整わない形でゆとりというのか、遊びというのか、自然というのか一つのみそかなと思うんですが、そのへんで何か構想の中にありましたらお聞かせ願いたいのですが。

長谷川園長　飼育員がこの構想に関わっている部分ですけども、今まで107年の経過とか、戦後考えましても何十年という中で、京都市動物園としてこの動物園をいかに良くしようというのは、職員全体で考えてきたところでございます。最近で申しますと5、6年前には飼育員が模型を創ったりしながら考えたということもございます。今回のことにつきましては、先ほど取組の方でも御説明いたしましたけれども、市民委員の皆様のワークショップの中で、飼育課の飼育員が主体となって事務局をしております。勿論、今座長をしていただいている伊谷先生が所長をされている京大の野生動物研究センターの准教授で本園に常駐する先生も含めて事務局をしていただいて、これからワークショップをお世話して、その中で職員も市民の皆様の御意見をお聞きして、彼らも彼らなりに色々な提案をしていくような形になっています。本委員会のお話も、私たちから飼育の方にお話をする。開園しながら改修するという中では、おとぎの国（ふれあい広場）を先ずというふうに考えておりますが、それについても、飼育の係長をチーフに色々考えていくということでございます。やはり現場からの意見を吸い上げて、いかにコーディネートするかということ動物園の責任者として考えているところでございます。

それから整わない部分というところのお話ですが、これも本園の特徴でございます園内の舗装がされていない点がポイントの一つかなと思います。これを如何に肯定的に、ポジティブに残していくかということをお考えたいと思うのですが、4ヘクタールの狭さの中でどのようにしていこうかと。それから敷地内緑化をしたいという欲もございます。壁面緑化もしたい。やれる部分でしたいといったようなことも考えながら、少なくとも今の園路が未舗装である特徴を、平地にある動物園として続けていこうというところではないかと思っております。

山内委員　少し話が戻るところがあるかも知れないですが、私も保育園ですので本当に小さい子どもたちが、動物園を利用させていただいていますが、保育園で何を言ったかといったら、「ゾウがうんちをしたー」って帰ってくるんですよ。保育園の園内で昔、うさぎを飼育していたということがありますが、飼育ケースのお掃除から全部、子ども達がしていました。ここへ来ると職員の皆さんが掃除をされているところをたまに見る

ことがあります。中々そういう機会には当たりません。動物を見せていただくだけじゃなく、そんな生活をしている何かの部分を見させていただいているような、そんな部分というのも、幼児からいけば教育という堅い部分じゃなく、実感ができるような、体験できる部分というのも残していただけたらと思います。

また、もうひとつ未舗装の話なのですが、先日保育園でお弁当を食べるのに砂地の所にシートを敷いて食べていたのですが、アリの上がってきただけで3歳児の一部の子どもが、「きゃー」と言って立ち上がってお弁当を食べるところではなかったと、未舗装でない所で常に生活していると、アリ一匹で大騒ぎなのです。ですから、自然のそういうものを体験していくことがもっと色々な場面で必要だと思う。動物園全てが舗装されてしまうことに関しては、是非、未舗装のところを残していただいて、高齢者の方の車椅子も通れるような、そんな工夫をされたらいいのではないかなというふうに思っております。

伊谷座長 色々な御意見ありがとうございます。今、未舗装と舗装の話が出ましたが、京都市動物園は環境にもやさしいと謳っておりますので、全面舗装すると温暖化にも繋がりますから、むしろ舗装しない方が良くないかという気もいたします。近いとか楽しいとかキーワードとしては、非常にわかりやすそうで難しい言葉なのです。楽しいってというのは、確かに楽しいってわかるのですけれども、人によってその楽しさが違ったり、それからパッとすぐに明快な答えが得られなかったりという部分があると思います。ただ、そこでは曖昧な言葉かも知れませんが、逆に言えば色々な楽しさが含まれているのだと、一言では言い表せられないような、楽しさがいっぱい潜んでいるのだよというイメージを持ち続けられれば良いかなと思います。それから、先ほど園長からお話ありがとうございましたけれども、一番の現場に近いところにいるのは飼育スタッフです。この人達が楽しければ、楽しい仕事をしてくれれば、恐らくそれは自然とにじみ出てくるんですね。人間は楽しいことは一所懸命しますから、嫌いなことは適当にやりますし、そうしますと結果は変わってくる。現場の飼育スタッフが一所懸命楽しんでやっていると、それは恐らく展示にも、全体の雰囲気にも反映されてくると思いますので、是非、現場のスタッフの方々、彼らが楽しく仕事ができるように我々がサポートしていければいいなというふうに思います。

その他の課題がいくつかあります。それから、コンセプトがあります。ここでは、そういった細かなことを一つひとつ取り上げていただいても結構ですので、他に御意見等がございましたらよろしくお願ひします。

小篠委員 小学校の方では遠足に動物園を選ぶというケースがちょっと減っているのではないかなと思います。私どもの方から考えれば、動物園のイメージはなぜかしら暑い、埃っぽい、それから臭いがする、そのあたりの3点セットがあります。

もう一つは、団体で50名なり60名なりで来る時に、もしや雨の時も考えてという、昼食なんかを摂らせる場所が非常に少なく、早く着いた他の学校の子供達のリュックサックがザーと広げられていたらそこはもう占有の場所みたいな感じで、中々遠

足の場所として入れにくいのが現実です。通路のこともありましたけれども、山土のようなしっかりとした湿りをもった通路ではなくて、砂っぽい、砂埃っぽいままですと、それこそ下に座らせて食事をさせることについてもやっぱりいいのかなって感じがします。そんな風なところがあって、あまり積極的に、遠足でも行こうという感じにはならなかったのと違うかなとそんな思いを持っています。この委員に選んでいただきましたこともあって、来月、1、2年生が遠足でここを利用することになりました。3名ほどの教員が徐々にゆっくり下見に来ました。印象は昔とは随分違い、明るくて楽しい動物園に変わりつつあります。色々な所に解説があります。子ども用のリーフレットもいただきました。ただ一つ、ここに来るとグループごとに自由に好きな動物の前で時間を過ごし、定時になったら戻ってくるという活動の仕方が基本かと思うんですけども、それにしても小学生、幼稚園の子ども達もそうだろうと思いますけれども、小学生に届く解説とか名札になっていない。ただ話はするけれども、ちっとも学習的な動物を通して学ぶということができていない。教員から、今日会議があつたら是非伝えてくださいと言われました。全てにルビが打ってあるものも、なかにはあるのです。でも子どもたちに手渡す冊子みたいなものをいただいたんですけども、漢字のままで、低学年の子どもたちは持つだけで、読むことができない、そういう現実ですね。利用者というか、学習者というか、ターゲットという訳ではないですけども、そういうところにピンポイントを当てて、動物園の再生に向けてというか、発展に向けて構想を進めていただけたらと、そういうふうに思います。

伊谷座長        ありがとうございます。何か事務局の方からございますか。

秋久副園長     本当に貴重な御意見ありがとうございます。そういう部分がまだまだ多く残っているとは思いますが。私も20年以上ここにずっと勤めてやっっている中で、お客様に発信していくもののベースというものが、実際には小学校5、6年生をベースにした発行物なり、表示が多かったというのが実際のところであると思います。ですから、手づくりの部分ですとか、そういう部分でちょっとずつは変えています、中々十分行き届いていないという、やろうとしているけれどもできてないところに対する、本当にストレートな御意見だと思います。これは、整備ということだけでなく、現時点からでも見直していきたい部分だと思います。ありがとうございます。

伊谷座長        今おっしゃった部分は、非常に、実は簡単そうで難しいことなんです。博物館とかそういう展示施設で、展示の説明内容とか文字の大きさ、配置の高さを決めるときに、その博物館が対象年齢、対象者を誰にするかによって変わるんですが、大体、小学校5、6年生から中学生ぐらいを対象者として年齢設定します。大体それぐらいの子ども達に判る事であれば、ほぼより多くの人に伝わるという現場から出している基準らしいんですが、確かに動物園というのはもっと小さな子ども、幼稚園もしくは小学校1年生の子どもも来ますから、そういう子ども達が読める、或いは触れられるようなものに変えていく必要があるなど、そういう子ども達が読めれば、もっと上の子ども達も読めるし、当然、大人だって読めるしと、なるべく年齢設定を低いところに設定す

る必要があるのかも知れませんが、逆に、もうちょっと難しいものを、何らかの形で置いておく必要もあるんじゃないかなと。つまり、子どもがわからなくても、それを見たお父さん、お母さんがその難しいほうを見て自分で解釈して、それを子ども達に説明してあげる。実はこれはこういう事なんだよ。こういう事をする事によって、お父さんとお母さんの株も上がるんですよね。「うちのお父さん偉いこと知ってるなー」とか。それも結構必要だとか、そういう場をつくることも動物園の一つの役割じゃないかというふうに思います。

この会議の場では恐らく表に出てこないようなこと、それから多くの人の前では中々議論できないこと、或いはもっと細かな部分、今ルビの問題も出てきましたけれども、そういうことも全部含めて、なるべく色々な意見を出していただいて、そうすることでそれが動物園の展示だとか、動物園づくりに反映されますので、重要な機会ですので是非、この他に御意見があればお願いします。

山内委員　　この前、御説明をしていただいた時にちょっと思ったんですけれども、動物園の北西角のところに、野生動物の救護センターがありますが、以前、野生の鳥が目の前に落ちてきたことがあるのですけれども、それを保護して近所の獣医さんをお願いして、その時は助からなかったんですけれども、その他にも山が近いのでイノシシやタヌキなどの保護が必要な動物のことを身近に聞くことがあるんですけれども、そういうことを動物園でされていることをあまり知らなかったんです。そんな野生動物がいた時にどうしたらいいかということ、私も聞いていなかったのか、耳にしていなかったのか分からないんですけれども、保護されているという話を聞いた時に、そんな活動なさっているんだったら、もっと市民の皆さんに身近に動物園が感じられるんじゃないかなということも思ったんです。もっと身近に野生の近くにいる動物にも手をさしのべているというような、そういうようなことをもっと市民の皆様にもアピールなさったらいいんじゃないかな。もっと身近なものに感じられるんじゃないかなと思いました。

山極委員　　先ほどの小学校の例で大変そうだなと思ったんですけれども、飼育展示施設については色々改修計画が出されていますが、この建物についてはあまり具体的な計画がないような気がします。例えば、幼稚園児、小学校、中学校の子ども達が動物を見に来て雨が降ったら、集合する場所が無いんですよね。お弁当を食べる場所もあまり無いのですし、その点は、例えば、文化施設ということで文化ゾーンとか、他のスペースを利用することも恐らく考えられるんでしょうけれども、是非これは京都市に考えていただきたいと思いますが、そのスペースの中でたった今見た動物のことを学んで、他の資料もある、そこにガイドさんが少し解説をする、或いは動物の骨や毛皮や様々なものをまたレプリカでもいいですけれども、手にとって眺めてみて、あーそうなんだというように感じ、ビデオも見るとい、ここにも施設はありますけれども、これでは手狭なような気もするんですよね。ですから恐らく建物制限はあるし、スペースの問題もたぶん限界があるでしょうけれども、是非この動物園の改修計画にあった、その学習施設の拡充計画も同時に考えていただければと思います。恐らく大学連携ということで、先ほど

伊谷先生もいわれましたけれども、専門知識の点ではこれからどんどん広がってくると思うんですね。それを、色々な形で利用できる可能性が増える。となると、そういうインターフェースを、色々な年齢の要請に応じて、色々な形で出していくことも考えられるので、そのバックヤードと展示施設、まあ博物館的な機能を持ったものも、動物園側が持つべきではないのかなと思いますが、いかがでしょうか。

長谷川園長　まさにおっしゃるとおりだと考えています。それと先生も言われた、建ぺい率とかそういう施設の制限が、非常にタイトで厳しくなっています。これから私ども局内の各施設とどのような協力ができるかということも、やはり考えていきたいと思えますし、動物園としては、他園に有るような立派なレクチャールームを擁したそうした休憩施設もあればいいと思いますので、この計画の中でも可能であれば色々な形でもう一度見直して、休憩施設とかいうところについても、園内でも整備していきたいと考えています。しかし、キャパシティの問題で限界がございますが、色々な形での御意見も頂戴しましたので、可能な範囲でそれらも織り込みたいと思います。

近森委員　今、山極先生がおっしゃったのもすごく大事な点かなと思ってまして、やっぱり動物とすごく身近で触れ合っただけでやっぱりワクワクしたり、色々な心を感じたことを更に高く、深める、子ども達が心で受け止める、更にそれをもう少し学習する場所という意味で、この施設を何とかできないかなと考えるところで、もし可能であれば次回、私が考えているものもありますので、プレゼンをさせていただければなと思っています。

伊谷座長　建物については、いろいろ一筋縄ではいかない問題が恐らくそれぞれの立場からでてくるんだと思いますが、そういうことも含めてどちらかという、先ほど園長もおっしゃっていましたが、何事も前向きにと、ネガティブではなくポジティブに捉えて、どうせ課題は多いんですからその課題をどうやって、避けるのではなくて、或いは止めるのではなくて、ポジティブに捉えていくという考え方で、今後進めていけたらいいなと思います。他に何かございませんか。どうぞ。

中山委員　ちょっと経営的なところで、考え方として経営品質というのがありまして、顧客満足度と従業員満足度、動物の満足度の3つの視点があって、ごちゃまぜに話をしだすと何が誰のためというものが明確にならないので、要は来園者というものが顧客と考えれば顧客をターゲット層としたときに、どこを重点的に考えていくんだというセグメントをきちっとする。顧客満足度の恐らく幼稚園の子ども達用のものも必要だろうし、小中学生のものも必要だろうし、さっき言われたお父さん、お母さんが子どもに説明するためのものも必要だろうし、どのへんをターゲットにしていけるのか、どこからやっていって満足度を上げていくのかということもやっていかないと「誰が」が不明瞭になっていくのかなと思います。

次の顧客満足と対比する従業員満足度と言った時に、動物園の従業員って誰？、飼育員の人であったり、物を売る人であったり、そして動物ということも実は従業員と考えていけば、そこが実際の稼ぐ場所と考えれば、その満足度もどういった形で考えていく

のか。ここに書かれているのは、実は動物園側からの、従業員満足度に重点が置かれていて、皆さんが今言われているのは、恐らく不満足が目線が足りないんじゃないですかというところを言われているように思いますので、そのへんの部分がうまく分かりやすくしていかないと、途中で論点が、何のためにが、顧客の側から見ると「足りひんぞ、足りひんぞ」、従業員の側からいくと「大変だ、大変だ」という、その辺の部分をうまくバランスよくして会議を進めていかないと、顧客満足度を僕らは求めます、僕らは。でも行政側は従業員満足度、動物の満足度をどうだということを言われるので、その辺の部分をきっちりできる場で話ができるといいかなと、両方とも重要だとは思いますが、でも、上手く折り合わなければどうせ無理なんだということで、今聞いている中での御意見という形で言わせていただきます。以上です。

伊谷座長 事務局の方から何か御意見はありますか。

秋久副園長 実際にそうだと思います。御意見があったように、どちらかというこの素案は、確かに現場の思いが詰まったものという捉え方をしていただき、今色々な方面の先生方から、顧客満足度という部分の色々な考え方が出てくる。その満足度、教育の部分、一般的にアミューズメントとして捉えるというような観点の部分、どこかでいったん満足するレベルというのを決めていただいております。この素案の私たちの思いを答えさせていただきます、進めていただければと思います。

伊谷座長 確かに、顧客満足度というふうな捉え方をした時、やっぱり、ものすごく幅が広いと思います。ある人はこれは気に入るけど、ある人は気に入らない。それを解消するためには、やはりこの京都市動物園というものがどういった方針でどういった方向性を目指すんだということを明確にして、それに向かって皆さんが動いていくわけで、その中で、どうやって来られる方々に、どうやって満足していただくか、楽しみや喜びを与えようかということになるんで、一概に、私はこれはこうしないと嫌だとか、これがないとダメだとかということを出すと、恐らく全然收拾がつかなくなってしまうと思います。だから、むしろ京都市動物園の最初にいくつかゴールというか、基本方針がありますので、それを達成するために、いったいどういうふうにしていくのか、来られる方に満足していただけるのか、或いは当然そこで働いている人達がどのように満足できるのか、そういうアプローチをすべきではないのかなと、あまり分散してしまうと收拾がつかなくなってしまうので。具体的にここ書いてあるとおり基本方針、コンセプトを見た上で、なおかつ働いている人、或いは来られる人、或いは動物園を取り巻く関係される方々がいかに満足していくか、満足してもらうか、或いは具体的にこういうふうにしていけば満足感が得られるんじゃないかとか、この方針が達成できるんじゃないだろうかと思います。もし、どなたか御意見がございましたらよろしくお願いします。

島田委員 今、さらに先生の話をお聞きして、若干思ったところですが、有ればいいなというもの、これは動物園に限らず、先ほど小篠先生がおっしゃった、子どもたちがトイレに行ったときに汚いとか言っていたことを踏まえ、例えばトイレがきれいであるとか、女性の方が2人とか4人で遊びに来られるような、そんな動物園というのが必要だと思います。

す。その女性的な目線とか、そういった時に、例えばトイレにウォシュレットがあるかどうかとか、そういったことも、あればいいのかなと思います。要素としては、実現可能かどうかは別にして、検討してみる余地があるかもしれません。

また、例えば食事の部分でも、とあるスキー場なんですけれども、今までスキー場のレストハウスのカレーはまずいというのが常識的にあったところを、逆転の発想でおいしいカレーを出しましょう。もし、そのカレーがまずければお金を返金します。というぐらいの覚悟を決めてカレーを作ったところ、そのスキー場は大繁盛し始めた。たった一つのことなんですけど、こういったちょっと違った視点とか、これまでできていなかったけど、それを変えることによって、随分流れが変わることもあるのかなというふうな気がしていますので、何かその、有ればいいなを出してみることで、その後、これはやっぱり費用的に難しい、ウォシュレットの掃除は管理面で難しいということであれば、判断してもらえればいいかなというふうなことも少し思いました。

伊谷座長 他に御意見はございませんか。

澤辺委員 商売上のことから考えますと、やはり、全ての満足度を皆さんに与えることは不可能に近いことだと思いますので、色々な話をした上で、優先順位をつけて、予算に見合う中で、できることからやっていくのが大事だと思います。

中山委員 リクエストなんですけれども、アンケートを取っているのであれば、来園者の満足度、もしくは従業員の中の飼育員の満足度調査などのデータを、もしお持ちでしたら公開していただいて、こういったものに何をお持ちだということを、今の中でいっぺん開示していただけたらうれしいなと思っております。

長谷川園長 現時点で、職員のデータはございませんが、来園者の皆様方には昨年の秋に3,000人程度の方からアンケートを頂戴しておりますので、それは次回、資料として提示させていただきます。

近森委員 今、御回答の中で、スタッフの方のアンケートはないということだったのですが、一度、是非、次回までにまだ1ヶ月ありますので、皆さんそれぞれがどんな思いで働いていらして、どんな動物園にしたいと思っていられるのか、それを早急に取りっていただくことができれば、大変良い資料になるのかなという気がします。

秋久副園長 私は飼育課長でもありますので、飼育員の思いを日常のヒアリングの中で仕事の話で聞きますが、具体的にこの動物園をどう変えていきたいとか、個々の意見を実際には取ったことはありません。ただ、当然色々な場面で、こういう計画を立てていく中で意見を聞き、この素案ができています。御指摘のとおり、まだ、1ヶ月ありますから、次回には提出できるよう検討します。

山極委員 私はですね、動物園というのは普通のアミューズメントパークとは違って、野生動物を扱う点で、非常に特殊だと思うんです。ですから顧客がこうして欲しい、欲しいと言ってもやはりできないこともある。動物のために配慮しなければならないことが多々あります。しかもそういう考え方が、世界的にも最近変わってきている訳ですね。ですから、こういう点でこういう動物の特性に合わせて、配慮していますということを、むしろ積極

的に動物園側が掲示をしたらいいと思います。そこで、例えば来る人が、動物にこういうことやらなくてはいけないんだと気がついたり、質問できたりする。それは、現場の飼育の方も気がついてないことがあると思うんです。或いは、現場でしか気がつかないこともあると思います。ですから、一般的なこの動物の特性に合わせたということと、動物の個々のつまり、今自分が預かっている動物の個性に合わせて工夫をしなくちゃならないものもある。そこを、動物園の立脚点としたらいいんじゃないかと思うんです。アミューズメントパークであると同時に、実は先ほどから意見がでていきますように、子ども達や大人が学べる施設にする。教育施設というのは全てサービス業でやっているとは話になりませんから、そこで、こういうことをお伝えしてるんですという自己説明が必要です。つまり、カリキュラムみたいなものが、必要なんです。ですから、色々な動物園で工夫しているところに、説明なり、掲示なりをしていくことが、むしろ、動物園の現場の認識や来てくれる人の認識を変えることにも繋がるし、それで、例えば、先ほどから色々言われていますように、現場の意識、それから、顧客の意識というものが、歩み寄れるのではないかなと思います。

伊谷座長　　今、山極先生がおっしゃったように、結構難しいことがあって、動物園の役割としては、よく言われるのが、展示とそれを通した教育です。最近では保全という言葉が入ってきましたし、一番求められるのがアミューズメント性ということではあるんですが、時として、それを追究してしまうと、とんでもない方向に行ってしまうというか、それはどう考えても、ディズニーランドには勝てないですよ。なぜかっていうと、ここは、ディズニーランドではないから。動物園なんですよ。そこで重要なことは、動物園が動物園としてどういった機能をもつのか、或いは、持たすことができるのか。更に、京都市動物園が、他の動物園とどうやって差別化を図れるのか、確かに、旭山動物園は人気が出ましたけれども、旭山動物園と同じことをやる必要もないし、やったら全く意味がないわけですよ。となると、京都市動物園としての本来持っている意味があって、更に、京都市動物園が、こういうあれでいきましょうという、オリジナリティー、独自性というものを打ち出していく必要が絶対でてくると思います。そういう意味で、先ほど山極先生がおっしゃたのは、非常におもしろい観点で、ゾウにも上野動物園の、多摩動物園のゾウと、京都市動物園のゾウと、全部一緒かという、違うんです。それぞれに個性があって、また、その個性というのが、その動物を見ている飼育担当の人との間にも形成され、つまり、動物と人との関係というものが出来上がってくる。そういうところに注目して、展示を開発した動物園は、あまりないと思うんですよ。ですから、むしろ、京都市動物園は、そういうものを取り入れて、実は、うちのゾウは、こんなやつで、飼育担当の人とはこんな関係ができていて、こういうふうにやりますよというのを全面に出していくのも、一つの展示手法というか、非常に高い教育効果を望めるんじゃないかというふうに、話を伺っていて思いました。その他、何かご意見はございませんでしょうか。

山田委員　　話を聞いていて、私自身の経験談ですが、6年ほど京都市動物園の飼育課長や園長をやりまして、ちょうど100周年を迎えた時、動物園の設備の点だとか、動物園が

なすべき役割という点で言えば、現在でもそうですが、当時からやはり、動物園をリニューアルする必要がある。それから、今話題になっている、来園者、お客さんを含めた関係について、改善する要素がたくさんある。その中で100年間を振り返りながら、京都市動物園は、どんな形で101年を迎えて行くんだろうかと思っていました。残念ながら、新しい動物園を創っていこうという作業に関わりながらも、成案を見るに至らなかった。たまたま、財政の問題とか色々あったのですが、その中で、新しい動物園像を打出すに至らなかった訳です。私自身が、園長時代に、多くのスタッフと議論した最大のポイントが、「動物に対する職員の姿勢、お客さんに対する職員の姿勢、意識」というか。動物に対しては、それぞれから見れば、新しい形で動物を捉えていく必要がある。京都市動物園というこの地にですね、生きている動物達が、どんな役割を果たしているのかなということを引き止めていくような、自然の中にいる訳でもないし、それぞれ限られた環境の中に動物たちは生きている訳ですから、その生きていることをどう光らせてあげるか、その意味をはっきりさせてあげる、これが一番大事であろうということです。それから、職員の姿勢という点で一番ポイントになったのは、そういう動物の生きている意味、或いは光っているところをお客さんに伝えられるか。例えば小さいお子さんには小さいお子さんなりに、お年寄りにはお年寄りなりに伝えられるかという点では、職員の姿勢というか意識というものがものすごく変わったと思う。自分の言葉で、自分で興味を持って、自分でお客さんに伝えるという意味での職員の意識の変わり方と言いますか、具体的に果たしている役割、例えば、一本一本の草のむしり方一つにしても、葉っぱの切り方にしてもやはり、何かを考えていることが感じさせられた。或いは、説明の一言一言、手描きのポスターの1枚1枚の中にも訴えるものがある。いくつかの動物園を見て回りましたが、職員の意識の変わり方は、素晴らしい、イケてる実感しています。その部分がこれからのウリになるし、その良さをこれからも生かしてもらいたいと思います。かつて、飼育員は動物に関する仕事を一所懸命やっていたけれども、お客さんには時にお尻を向ける、声を掛けられそうになるとそっと横を向いてしまうこともあった。お客さんは飼育員とも話したいのに、飼育員の腰が引けていることが決してなかった訳ではない。しかし、何のために仕事をしているのかという議論から、そういったことを一つひとつ克服してきたこの数年間が、かなりいい形で花開いてるなと思います。これが、今回、設備も含めてですね、いい形にまとめれば、新しい動物園像というのは、決して旭山動物園でもない、大阪でも東京でもない、京都の動物園ができるのではないかと期待しています。自分自身のことを思い出しながら、皆さんのお話を聞いていたのですが、何が一番京都市らしく表現できるのかということを考えていきたいと思っています。学習の場というソフト面の話ですが、色々な層の方々がいるわけですから、それぞれ人によって、何を学ぶか、違うんだと思うんです。例えば、赤ちゃんであれば赤ちゃんの学び方があるわけですし、幼稚園或いは小学校、中学校、高校、それぞれの成長段階で何を学ぶかということが、ポイントになってくると思うんですね。何を学ぶかによって、対象の方々、世代別のテーマ別のプログラムを作る作業を進めると、非常に面白いものができるんじゃないかと思っています。

伊谷座長　　私も色々な動物園を仕事柄回るんですが、正直申しまして、京都市動物園は非常に雰囲気がいいです。スタッフの方も熱心ですし、積極的ですし、ある意味、山田委員の意見を反映させるとすれば、京都市動物園の場合は主役が動物だけではなく、飼育員も主役だと捉えることもできなくはないという気がいたしました。それから最後におっしゃったプログラムの問題ですけれども、実はこれも非常に難しいことで、一筋縄ではいかないことなんですね。動物園では中々無いんですけれども、日本の博物館でも無いんですけれども、本来、こういったところにはエドゥケーターっていう教育普及担当という人が必要なんですよね。エドゥケーターは飼育スタッフでもなく、研究者でもない。独自のポジションです。アメリカ博物館には必ずあります。何をしているかという、お客さんの満足度を測定して、常に園内をうろろして、お客さんがどんな反応をしているか調べている。そして、アンケート調査を行って、その都度、展示を変えていく。なぜ重要かという先ほど島田委員がおっしゃった「難しいことを難しく言うのは楽だ」と。まさにそのとおりで、研究者が展示開発すると、見に来た人が何がなんだかさっぱり分からないんですよ。難しすぎて。研究者が見に来ればいいんですが、そうじゃない人たちが見にくると「何がなんだか、さっぱりわからん」と逃げちゃう。それを一般の小学生向け或いは高校生向けというふうに書き換えて、展示に生かしていくのがエドゥケーターの仕事で、こういう役割を担う人が今後必要になってくるのかなと。特に、動物園の場合ですと、我々ですら色々な情報を常に手に入れながら、学説が変わったりですね、変化がある訳ですから、それに即してですね、もっと分かりやすく、発信していくことも取り入れていくことを、少し考えた方がいいのではと思います。

山極委員　　今の話はもっともだと思います。マスコミを利用する術を考えた方がいいと思います。例えば、KBSの中に動物園コーナーを設けるとか、京都市動物園コーナーを毎月、週1回設けるとか、そこで動物園のホットな話題を出していく。どういう人に向けて、どういう人にきて欲しいかという、動物園側の姿勢も同時に出す。それが一つの動物園の紹介記事になって、こういうところで新しいものが見れるのかなっていうところで、京都市民或いは滋賀、大阪といったところに伝わっていく。地元の人たちと、遠くからくる人と両方いるんですけど、少なくとも、京都市の施設ですから、地元の方にリピーターになってもらうように、例えば、小学生の子どもたちに毎日話題にしてもらえるような、そういうトピックスを提供する必要がある。そのトピックスは、決して新規のものを狙わなくてもいい。例えば新しいことでなくてもいい。こういう動物の、ある行動の意味を、一言メモで紹介するといったこと。飼育員の現場の人は知っていることでも、一般の方がわからないようなことを発信するのも面白い。このような働きかけもいいのでは。

升光委員　　展示で字が多いと、動物の様子を見ずに字を追って次へ行くという状況がある。何だろうと思って、そこへ溶け込み、安心できる、頭を解放できる雰囲気が必要。説明より、どうしてだろう、不思議に思うことを後から尋ねることができる環境がいいのでは。全部頭で分からない方がいいのでは。

島田委員　　一つ目は、頭で考えるより、「京都市動物園らしさが、どう求められているの

か？」を考える必要がある。世界から客を迎えるとしたら、らしい、らしくないの検討、議論のバランスなのではないか。

二つ目は、伝えることの大切さ。今までは見せるだけ、見るだけで良かったが、今後は分かりやすく丁寧に伝えていく必要がある。

山内委員 亡くなったゴリラの檻を飼育員が黙々と掃除している光景を見て、このようなことを見せていくこともいいのではないかと思った。心を打たれた。動物園だから、生死をきちんと伝えられることが、また来ようかなと思うことにも繋がるのでは。

伊谷座長 色々御意見いただき、ありがとうございました。

本日の議論で、素案にあります、動物園の現状と課題、基本テーマ、コンセプトについて、概ね「動物園案」の方向で委員会として意思統一できたのではないかと思います。さらに、今日新しく加味されたことも、今後生かしていけたらいいと思います。

したがって、次回は「施設整備」面を中心に議論したいと思いますが、いかがですか。資料を今一度読んでいただいて、意見を述べていただきたく思います。

日程は5月19日（火）の午前10時から12時に決定します。

本日はありがとうございました。

最後に、事務局から案内事項の連絡をお願いします。

(希望者による園内視察案内)